

## 第十章 京都 一 堀河館

入浴する日の早朝、今までの旅の埃を落とすために、牛飼い童は網代車を綺麗に洗って磨き上げ、武士達は馬を刷毛で綺麗に梳き、朱の手綱と組み紐で飾り付けをした。それから、一行の全員が順次湯浴みをして、身体を清潔にし髪を整える。

郷子は、鎌倉で用意してくれた晴れ着を身に着けた。桜重の単衣に、山吹ともみじと菖蒲の桂を重ねると、その上にさらに花橘の唐衣を羽織る。顔には、うっすらと白粉をつけ、眉を黒く描き唇に紅をさす。髪は後に纏めた下げ髪とする。手には檜扇を持った。

郷子は、初めての正装が恥ずかしかった。

(まるで、ひな祭りの雛人形のようなわ)

それに、衣装が重くて窮屈で体の自由が利かなかった。普段通りに歩くと裾が絡まって転びそうだ。歩幅を小さくしてちょこちょこ歩かなくてはならない。

(このような衣装を着て毎日を過ごすのなら、とても耐えられないわ)

郷子が、外に出ると、小太郎を先頭にした隊列がもう整っていた。

武士や侍女はいうに及ばず、下僕や下婢や牛飼い童にいたるまでそれなりにこの日のために持参した衣裳で身なりを整えている。

郷子が、網代車に乗ると、隊列は静々と進み始めた。

道行く人々が、物珍しそうに見ながら通り過ぎてゆく。

一行は、大津宿を出ると京への入り口である粟田口を通過して東海道の終着地である鴨川の畔に着いた。その先の三条大橋を渡ると平安京である。鴨川は、しばしば洪水を起こし、権勢を誇った白河院でさえ、自分の意志でどうにも対処できない物として、鴨川の水、双六の賽、山法師を上げている。

婿である義経側からの出迎えは無く、ただ、義経の居住する六条堀河館に直接来てくれという連絡があっただけだった。

三条大橋を渡るとそのまま三条大路には入らずに鴨川の豊かな清流沿いの道を南下して下流の五条大路に向かう。義経の出迎えの無いまま都の中央を通りたくないという小太郎の配慮である。左遠方に見える山の緑は、紅葉に向けて薄黄色に変わりつつある。右側の東京極大路の向こう側には、豪華な屋敷の優美な瓦屋根の連なりが見える。今まで見た鎌倉御所など及びもつかないような壮大な規模の都の存在感がひしひしと現実になって迫ってくる。

碁盤の目のように整備された大路、そこを行き交う絢爛たる衣裳を身につけた人々、豪華に飾りつけられた牛車、綺麗に剪定された緑の木々、色とりどりの花の咲く美しい景色を遠望しながら、郷子は、この平安京をつくった皇室の偉大な権威を感じて、興奮を抑えることができなかった。

郷子が、車に揺られながらしばらく鴨川を眺めていると気がついたことがあった。

河原に檻褌のようなものに包まれた灰白いものが所々にうち捨てられている。それにカラ

スが集まってついばんだりしている。そして、それがどうやら人間の死体らしいと判った時に郷子は激しい衝撃を受けた。餓死したり、疫病にかかって死んだ人の死体が河原に無造作に捨てられているのに違いない。そういえば、川の流れの中にもそれらしい死体が時々流れていくのに気がついた。

美しい風景、豪華な建造物、そこに住む年貢で暮らす優雅な貴族たち、その一方で餓死したり疫病にかかったりして、河原にうち捨てられている貧乏人や乞食。

郷子は、都の光と影を見たように思った。

三善康信が、言っていた言葉を思い出した。

「この国は、いま疲弊しています。上流階級による大衆からの搾取と政治的無策が、いまの飢饉を引き起こし大衆を苦しめているのです。私と大江は、いまの政治体制を変革しなければ、この国は落ちる所まで落ちてしまう。私達は、どんな犠牲を払っても、この目的を果たさなければならぬという情熱に燃えています」

郷子は、彼の言った言葉の意味が初めて実感として判るような気がした。

五条大路に近づくと、前方の川向こうに見える広大な敷地に多くの建物が焼け落ちて、墨だらけになった柱や屋根や家具の塊、割れた瓦、崩壊した築地塀などが見渡す限り広がっているのが見えた。そうとう大規模な火災があったに違いない。

網代車の横に平行して馬を進めていた小太郎が車の中の郷子に話しかけた。

「あそこは清盛が栄華を誇った平家の牙城である六波羅御殿の焼け跡だ。平家一族と傘下の郎党の屋敷が数千軒はあったという。清盛が死に、平家が倶利伽羅峠で義仲に大敗北を喫し、義仲に追われた平家一族が安徳天皇と三種の神器を奉って都を落ちのびるさいに、火をかけて燃やしてしまったのだ。二十年以上も続いた平家の栄華も一瞬にして燃え尽きて灰になってしまった。哀れな事よな」

郷子は、平家は屋島に落ちたが、いまは、続々と西国から兵が集まって再度上洛を狙っているという噂を聞いていた。

(平家は、何故自分達の邸宅を焼いて落ち延びたのだろうか。その時には再度、都に戻ってくるという気概が無かったのだろうか。これから向かう六条堀河館は、義朝さまの先祖の頃からずっと源氏が使っていて、頼朝さまも蛭が小島に流されるまでそこで成長されたと聞いている)

一行は、五条大路まで来ると鴨川を離れてそのまま都の中心部へ直進していく。大路の両脇には、摂関家である藤原氏一族の豪壮な大邸宅が途切れることなく連なっている。大路には、立烏帽子に直衣を着た貴族と思われる人々が行き交い、また、ところどころに豪華絢爛たる糸毛車が止められている。都でも特別に富裕な人々が集まる一角であるようだ。このような環境では、いかに着飾った馬や網代車の隊列でも、みすばらしく見えざるを得ない。

義経の正室が、輿入れするとの情報が流れているのだろうか、この隊列を興味深そうに見送る貴族も少なくない。止められた糸毛車の御簾を上げて、着飾った姫君がこちらを覗い

て見ていたりする。

郷子は、なにか意心地の悪さを感じて、この一角を一刻も早く抜け出て、堀河館に着きたいと思った。

一行が、五条大路と南北に走っている大宮大路が交差する地点で、左に折れ六条大路までくると、そこが堀河館であった。堀河館の規模はかなり大きいが藤原氏一族の華やかな豪邸と比べると武家屋敷らしく簡素で実用的な造りである。正門から前庭を挟んだ正面の本殿は、左右と背後の対屋に取り囲まれている。前庭の右側には大きな厩がある。本殿の後ろにはかなりの人数の武士が待機できる侍所の大きな建造物も見える。

しかし、池や釣殿のような非実用的なものはない。

一行が正門を入れてゆくと、前庭の両脇に十数人の若侍と侍女や雑仕女が並んで迎えてくれた。予め伝令が、郷子到着を連絡しているので、義経の配下の若侍が待機しているのは判るが、それにしても遠路はるばる旅してきた主人の正室を迎えるにとしては、盛り上がりのまったく無い寂しい歓迎振りだった。

郷子は、網代車の牛が長柄から外されるのを待って、前方から降りた。

義経も主要な武士も不在のようで、郷子が車を降りても、誰かに挨拶されるわけでもなく、出迎えた若侍や侍女や雑仕女もただ立ちつくして、好奇心に満ちた目で郷子をじっと見つめるだけで、歓迎する声も拍手も無い。

郷子は、車から降りてもただ黙然として立っている若侍や侍女にどう挨拶していいかわからず途惑うばかりである。誰とはなににしに会釈して途方にくれていると小太郎が目で付いて来いと知らせる。小太郎は、正殿の入口で履物を脱ぐと、出迎えた侍女に場所を聞いて、勝手に奥に進んでゆく。郷子が重い衣装に足をとられながら付いていくと、襖を開けてある一室に入った。

「ここで、待っていなさい。判官殿は、いま警備のために見回り中らしい。遠からずお戻りになるということだ」

「父上は、居ないのですか」

郷子は、心細くなって訊いた。

「父上と河越の郎党は、義仲の縁者による反乱を鎮圧するために北陸のほうにまだ出陣中だ。だから、出迎えも少なく、寂しいだろうが堪えてくれ。婚礼までには必ず戻ってくるはずだ」

「判りました。私は大丈夫です」

小太郎は、郷子をそこに一人残すと部屋から出て行った。

郷子は、狭くはないが広くもない部屋で一人ぼつんと残された。せめて、志乃と一緒にいてくれれば心強いのにと思わずにはいられなかった。

部屋からは、庭が見えた。まだ、残暑が厳しい熱した光の中に百日紅の薄紅色の花が咲いている。

沢山重ね着しているせいで、とにかく蒸し暑かった。汗は出るし、喉もひどく渴いていた。

しばらくすると部屋の襖が開いて、一人の女性が入ってきた。その女性は郷子の前に茶の入った湯飲みと黒砂糖の蜜をかけた葛切りが載っている高杯を置くと、丁寧に挨拶した。

「遠路はるばるご苦労さまでございます。ただいま、判官さまは、都の警備のために洛中を巡回中でございますので、お出迎えは出来ませんでした。お仕事が済みしだいすぐに帰ると申されておりましたので、しばらくお待ちいただくようお願い申し上げます」

郷子は、この家の者に初めて丁寧に歓迎の挨拶をされ正直ほっとした気持ちになると共にこの女性に好意を感じた。

「毎日巡回されるのですか」

「通常は、配下のものが見回りをしておりますが、ご自分で見回りされることもございます」

郷子は、湯飲みを取ってお茶を飲んだ。冷たく冷やしてあって喉の渴きを癒してくれた。女性の心配りが感じられた。

(義経さまは、今日に限って、なぜだか特別にご自分で見回りされているのだわ)

郷子は、その理由をあまり考えたくなかった。

女性は、郷子とほぼ同じ年頃の十七～八歳だろう。黒髪を長くたらし、細面の顔は色白で切れ長の目に鼻筋が通った驚くほど美しい顔立ちの女性だった。

(やはり都には美しい女性が多いのだ)

郷子の想像通りだった。

「治安が悪いのですか」

「いま都では、庶民の食料が不足していて、貴族や商家など食料を備蓄している家への押し込み強盗が多発しているのです」

「これだけの大きな都ですから、取り締まるのは大変なのではないでしょうか」

「一組五騎の十組で順番に回っておりますが、それでも足りないぐらいだとか」

「義経さまは最近従五位下、檢非違使に任官されたとか」

「そう、たいそうなお喜びようで、大々的な祝宴会を催し、三日三晩大騒ぎでした」

「そんなに派手に！」

郷子は、頼朝の許可なく任官したことに関する大江広元の懸念など、この女性に話すべきではないと思い、口をつぐんだ。

「東海道の旅は、楽しゅうございましたか」

「わたしは河越で育ち、今までそこから遠くに出た事はありませんでした。今回が初めての長い旅でしたがこんなに楽しかったことはありません。ただ、途中で山賊に襲われたりはしましたが」

「まあ、山賊に！」

女性は、目を大きく見開いて心から驚いた表情を浮かべた。

郷子は、山賊の話など珍しい話ではないと聞いているが、この女性の仕草や表情にはつい曳きつけられてしまう。話し上手、聞き上手とはこういう女性を指すのだろう。

「恐らく荷車に積んだ食料が欲しかったのでしょう」

「それでどうになりましたか」

「弓の上手な侍女と剣術に秀でた侍女の活躍で撃退しました」

「侍女二人で山賊を負かしたのですか」

「もちろん武士もいましたが、何分狭い山道でしたので、この二人の活躍がなければ、苦戦していたかもしれません」

「そのような武芸に巧みな侍女が御一緒されているのでしたら心強いですわね」

「私も、二人があのようにすばらしい武芸の腕を持っているとは知りませんでした」

「あなたさまも武芸をなされるとか」

「私は、あの二人にはとても及びませんわ」

(この女性はなぜわたしが武芸をする事を知っているのだろうか)

「実は、私もすこし武芸をするのです」

女性は、郷子の共感を得るように、顔をわずかに傾けて微笑む。

「まあ、あなたも！」

確かに、動作にめりはりがあって無駄な動きが無い。

「では、準備してまいりますので」

そう言うと女性は、丁寧に挨拶すると部屋から出て行った。

郷子は、また一人部屋に残された。

(あの女性は、義経さまの侍女だろうか。いえ、侍女ではないわ)

部屋の襖が思い切りよくさっと開けられると、立烏帽子を被り、白い水干に紅長袴を穿き、白鞘巻の刀を腰に差した武士が背を伸ばして静々と入ってくると、郷子の前で正面を向き立ったまま郷子に会釈をした。

良く見ると驚いたことに、先ほどの女性だった。

女性は、刀を抜くとそれを掲げて静かに舞いだし、しばらくすると、今様を歌い始めた。

祝いのためしに ひかるるは

春日の峰の姫小松

八千代に咲く玉椿

糸貫川に住む鶴

長井の浦に遊ぶ亀

(すばらしい)

郷子は、この女性の踊りと今様にいままで感じたことのない深い感動を覚えた。

河越での送別会で可奈と八重の歌と踊りが上手いと思ったが、所詮は素人芸であるというのが良く判った。この女性の歌も踊りもそのような素人芸とは全く別物の本物の芸だった。

郷子は、圧倒されてどう褒めてよいか判らなかった。

女性は、郷子の前に折り目正しく正座すると、話しました。

「お見せいたしました通り、武芸と言っても、私の武芸は踊りの中ですのでございます。ですから、本物の武芸はできません」

「あなたは？」

「ご挨拶が遅れましたが、静と申します。

ご婚礼の席では私がお祝いの今様を唄い舞をまうことになっています」

（この卓越した歌と踊りの芸を持つ美貌の女性が、義経さまと噂のある静御前なのだ。この人にはとてもかなわない）郷子は、思った。

「私と義経さまの婚礼をお祝いしていただけるのですか？」

郷子は、素直に驚いて疑問を口にした。

「私は、芸人でございます。それを判っていただくために歌と踊りをご披露いたしました。芸人は、芸人としての分を心得ております。北の方さまの領域を害するつもりは全くございません。ただ」

「ただ？」

「ただ、分に相応して親しくさせていただきたいと願っております」

静は、玄人なりに玄人の論理を展開しているのだった。

彼女は、貴人の間では常識になっている現在の一夫多妻のもとで、夫と妻という婚姻関係とそれとは別な男と女の情念の世界を知り尽くした大人の対応として、義経と先に恋愛関係に入ったにもかかわらず、後から強引に割り込んできた郷子を正室として認め、自分は妾に甘んずることを表明したのだ。

郷子は、もし、ここで我を張れば義経との間は、今後永久に修復がきかない冷たい関係になるだろうとの恐れを本能的に感じた。また、この見たことも無いほど美しく、卓越した芸をもつ女性と張り合う気は起こらなかった。

「私は、頼朝さまのご命令で輿入れする事になりました。好き合った男女の仲を壊す事は、私の本意ではありません」

それを聞くと静は、ほっと深いため息を漏らしたあと、晴れ晴れとした顔で郷子に満面の笑顔を向けた。

「あなた様のようなお方が御正室になられて真に幸せにございます。どうぞ末永くご最良の程よろしく願い申し上げます」

静は、舞台上で挨拶するような口上をすると立ち上がって優雅に部屋を出て行った。

郷子は、静御前に対して嫉妬のようなものは感じなかった。郷子は、いままで男性に恋愛感情を持った事がなかったので、嫉妬という感情については、実感が湧かなかった。しかも、まだ会ったこともない男性のために嫉妬など感じようがなかったのである。

仮に、静御前の方が郷子に嫉妬の情を示していれば、恐らくこのように平穏な気持ちではいられなかったに違いないが、彼女は、そんな素振りは一切見せなかった。

静御前は、年頃は同じといえ男と女の関係については経験上からも今様の名手としても郷

子とは比べものにならない程の深い知識があるに違いなかった。

(彼女とは上手く付き合っていこう)と郷子は心に決めた。

彼女となら仲良くやっていけそうな気がした。

郷子が、また一人残されて庭の百日紅の花を見ていると、襖が開いて若い男が入ってきた。

(この方が義経さまだろうか)

郷子は、若い男をまじまじと見つめた。背が高く肩幅の広い明るい顔をした好男子だった。

若い男は、彼女に笑顔を見せると「こちらに」と言って、背を向けて部屋を出て行った。

郷子は、さっさと進む彼の広い肩幅を見ながら衣裳を引きずりながらなんとか遅れずに付いていった。

男の事務的な態度からみてどうやら義経ではなさそうだった。

男は、ある部屋の襖を開けると「ここでお待ちください」と言って去っていった。部屋は、先ほどの部屋よりも倍も広かった。郷子が中に入ると、誰もいない部屋の中ほどに短弓と矢筒に入った矢と短刀と木刀が置かれていた。郷子が近づいて確かめると、志乃が網代車に旅の用心のために積んでおいた物に間違いなかった。

(なぜこんな物が部屋に置かれているのだろうか)

郷子は、不思議な感じがした。

郷子は、その部屋でかなり長い時間正座して待っていたが誰も現われなかった。日がだいぶ落ちて夕暮れが迫りつつあった。足が痺れてきたので、膝を伸ばした。昨夜は入浴する興奮であまり良く眠っていないし、今朝の出立も早かった。痺れた足を揉んでいると眠気が潮のように押し寄せてきた。このまま横になったらどんなに楽だろうかと思えた。どれほど待たされるのか見当もつかなかったし、どうせ待たされるなら、少し横になっていたという誘惑に逆らえなかった。郷子は、そのまま仰向けに横たわった。少しの間だけとっていたが、何時の間にかぐっすり寝込んでしまったらしい。何かが肩をしきりに小突いていた。初めは、夢のなかで小鳥に突かれているような気がした。

郷子が、ぼんやりと目を開けると、赤い夕日を背景に小柄な男が上から彼女を興味深そうに覗き込みながら細い杖のようなもので、彼女の肩を小突いていた。

郷子は、不覚と思った。戦ならもうとっくに寝首を欠かされている。

武芸指南からは、再三気の緩みが命取りになるとこんこんと説示されていた。

郷子は、突然はつきり目をさますと、分厚い衣装に体の自由を奪われてよろけながらも、近くにあった木刀を杖にしてなんとか立ち上がった。

郷子は、男が傍に近づかないように右手に持った木刀で牽制しながら睨みつけた。

良く見ると男は若くて色白な貴族のように整った顔立ちをしている。

まるで弱そうに思えたので、郷子が木刀を引こうとすると、男は細い杖で彼女の木刀を横に払った。軽く振ったように見えたが、木刀に対する衝撃は強く、郷子は、危うく木刀を落としそうになった。

(外見にごまかされてはだめだわ)

そして武芸指南が言った言葉を思い出した。

(先手必勝)

郷子は、右手で木刀を上段に引き上げると、若い男の真正面から怪我をしないように軽く打ち下ろした。木刀は、体を掠めただけで当らなかった。郷子は、一步踏み込むとまた打ち下ろした。男は、僅かに身を引いたように見えたが、また当らなかった。郷子は、次第に興奮して頭に血が上ってきた。

今度は二歩踏み込み、両腕を精一杯伸ばして、強く打ち込んだが、どういうわけか、身体を掠めただけだった。男の間合いの取り方が絶妙だった。

そこで三歩踏み込むと今度は横に払った。男は、素早く頭を下げて木刀をやり過ぎた。郷子は、それを読んでいたので返す木刀で足を払いにいった。しかし、男は、驚くべき敏捷さで高く飛び上がったため木刀は空を切った。

それではと、郷子は、木刀を真っ直ぐに構えるとそのまま一直線に突っ込んで行った。しかし、相手はもう正面にはいず、郷子は、身をかかわした男の真横を通り抜けて行った。

男が郷子の足を払ったので、郷子はそのまま真っ直ぐに顔面から畳に倒れこんだ。木刀が手を離れて遠くに飛んでいった。郷子が手と膝を突いて四つ這いに立つと、横に若い男の足が見えたので、それを目掛けて組討ちに行った。しかし、どういうわけか、郷子は一回転して仰向けになっていた。若い男は、素早く郷子の腹の上に跨ると両手で、彼女の両手を押さえつけた。郷子は、跳ね返そうと思ったが、男の体は、びくとも動かなかった。

郷子は、この若い男に手も足もでない事がわかった。

「この俺に勝てると思ったのか」

若い男が生意気そうに言った。

郷子は、一見弱そうに見えるこの男に負けたことが悔しかった。

「こんなに重い衣裳を着ていなければ、不覚は取らなかった」

「それでは、裸になってもう一度やってみるか」

男は、明らかに郷子をからかっていた。

郷子は、下から男を睨みつけた。

「無礼な。わたしは、義経さまの正室として招かれたものですよ」

「誰も招いてなぞいないぞ」

郷子は、改めて男の顔をじっと見つめた。

誰も、義経の容姿を教えてくれなかった。小太郎は、「会ってのお楽しみ」と言っていた。

郷子は、一の谷の武勇伝から、精悍な顔を持つ筋肉隆々とした偉丈夫を想像していた。

「だれ？」

「俺か、俺はお前の婿だ」

「え！」

郷子は、絶句した。体から力が全部抜けてぐったりと横たわった。

義経は、郷子が力を抜くと腹の上から立ち上がってすこし離れて座った。

郷子は、幾重にも重ねた衣裳と格闘してなんとか正座すると、義経の前に平伏した。

郷子は、まだ、この小柄で色白な男が義経だとは信じられずに半信半疑だった。

「弓矢と短刀と木刀をなぜ網代車などに隠していたのだ」

「隠していたわけでは、ございません。ただ、侍女が道中の用心のために用意したものでございます」

「短弓の上手な侍女と剣術の優れた侍女がいるそうだな」

「あの二人があればほどの使い手であるとは、わたしも知りませんでした」

「お前もすこしは武芸の心得があるようだ」

「お恥ずかしい次第でございます」

「俺を討つのは難しいことが判ったであろう」

「討つなど滅相もございません」

郷子は、今日に限って義経が見回りに出て屋敷を不在にした理由が判ったような気がした。先に静御前に会わせて郷子がどのような女であるかを調べさせて、二人の気が合うかどうかを確認させた。そして次に、郷子の武芸の腕前がどの程度であるかを探るために仕掛けをしたのに違いない。

（義経さまは、頼朝さまがなぜ相談もなくわたしを正室に決めて送り込んだのか、もともと疑念を抱いているのだ。はからずしもさっき木刀で打ちかかったことで義経さまの疑念に確信を与えてしまった。きっと、この縁談は断られるわ）

郷子は、情けなくなって涙がでそうになった。

「来る前に鎌倉へ寄ったであろう」

「はい」

「兄者と面会したか」

「頼朝さまと政子さまにお会いしました」

「兄者は、俺の事を何と言っていた」

「雑談のほかには、特に」

「雑談？ 雑談とは何だ？。俺に言えないような話か」

「いえ」

「では、言ってみろ」

郷子は、いよいよ窮地に立たされたが、正直に言わないわけにはいかなかった。

「『九郎は女好きだから、女子との色事で苦勞させられるかもしれぬな』と申されました」

「ははは、そんなことを」

義経は、予想に反して怒るどころか、笑っている。

「政子さまが『義朝さまの種で兄弟良く似ていると』と申されました」

「はははは」

義経は、笑い出すと止まらなかった。しばらく笑った後に言った。

「兄弟良く似ているとな」

義経は、さらに機嫌がよくなった。

「それで、兄者は何と申した」

『お前が亀女の家を壊したりするから、鎌倉中の笑いものになった』と政子さまを怒られました」

「それで姉者は？」

『あなたが悪いのでしょうか』と」

「そしたら兄者は？」

『他人の前で話すことではないと』

「ははは」

「政子さまは、『何処に他人がいるのですか。郷姫は、あなたの弟の嫁ですよ』と言われました」

「そうか。姉者がそんなことを申ししていたか」

義経は、満面に笑いを浮かべて、うれしそうに何度も自分にうなずいていた。

「今夜はお前のところに忍んでいくから、もっと話を聞かせてくれ」

郷子は、急に心臓の鼓動が早くなり、顔が赤らむのが判った。それで、しどろもどろになってかぼそく言った。

「まだ婚礼も済んでいないのに」

義経は、珍しいものでも見るように、郷子をじっと眺めた。

「兄者に礼を言わなくてはならんようだな」

義経は、誰とはなしに呟くと部屋から出て行った。

郷子が、どうやら破談にならずに済んだらしいとぼんやり考えていると志乃が入ってきた。

「武士が、急に網代車の中を調べて、弓矢と短刀と木刀を見つけて、持って行きましたので心配していましたが大丈夫でしたか」

「義経さまとは知らずに、木刀で討とうとしたら、反対に投げられました」

「まあ、どうしてそんなことに」

志乃は、呆れたように郷子の顔を見ていたが驚いた様子で言った。

「お顔に傷が」

郷子は、手で顔を触ってみた。さっき、顔から畳に突っ込んだ時に怪我をしたらしかった。

ひりひりと痛んだ。手に血がついていた。

顔は恐らく白粉もまだらになって、傷だらけで見るも無残な惨状になっているに違いない。

気を付けて見ると、重ねた衣裳も前が乱れて酷い有様だった。

(婚礼をする前に、とんでもないところを見られてしまった。それでも義経さまは今夜忍んでくるのだろうか)